

2026年3月25日

理学部数学科学位記伝達式における
理学部数学科長の告辞

2025年度 数学科長 河澄響矢

皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご家族の皆様には心からお慶びを申し上げます。

東京大学理学部数学科は単位を出すことについて妥協していません。したがって、所定の単位を揃えて卒業要件を充たすこと自体、大きな成果であり、皆さんが胸を張って卒業を迎えるのは当然のことです。ここまで皆さんを助けてくださったあらゆる方々に学科長としての私からも感謝を申し上げたいと思います。

しかし、私たちの数学科には卒業論文がありません。それでは、私たちはどんな達成を祝っているのでしょうか？前期課程では語学や様々な分野の学問とくに数学など自然科学の基礎を学びました。進学選択後の後期課程では現代数学の基礎を組織的に習得し、そこで得られた基礎の上で、4年生セミナーで一つの話題について集中して学んだはずですが、数学は、他人の話聞き、自分の話を聞いてもらう繰り返しです。したがって、皆さんは、数学の新しいオリジナルな結果を生み出し論文に書くことを別にすれば、数学において一通りのことは学び終わりました。これらが我々が今日祝っている達成です。

それでは、前期課程と後期課程を通じて、これらの達成は、皆さんにとって何を意味するのでしょうか？それは、数学を中心に自分を教育できるようになったことだと私は思います。誰かに教育してもらうのではなく、自分を自分で教育することができるようになったということです。このことが大学における教育の要だと思います。政府や大学執行部は国際的な大学ランキングを気にします。しかし、ランキングの前に高等教育機関として、その大学が本物か偽物かを問うべきです。私自身が卒業生であり、長年教員として勤めている東京大学理学部数学科は偽物ではないと信じます。自分自身を振り返って、東京大学とくに理学部数学科で学んだことを通して、それは貧弱で頼りない歩みではあっても、今日まで自分で自分を教育し続けることができたからです。

しかし、以上の議論に反するよう見える事象があります。1990年ごろから35年以上も大学は「改革」し続けていますが、うまくいっているとは思えません。うまくいっているなら35年以上も「改革」し続けるはずがありません。他の社会現象でも類似のことが見られます。「大学改革」を含め社会現象には様々な要因がありますが、今日の議論に関連する一つの要因として、制度設計者たちが主観的な願望に引きずられていることがあります。もちろん何かを希望し願望することは大切です。しかし、その願望を他者のさまざまな視点、判断基準、で検証し適切に修正することがなければ害毒となります。自分を自分で教育することは、願望や希望を適切に修正するために必要なさまざまな視点、判断基準、を手にいれる有力な手段です。現状を見るに、東京大学の卒業生を含め、社会の構成員の多くが自分を自分で教育することをサボっていると言わざるを得ません。皆さんには是非、自分を自分で教育することを続けていただきたいと考えます。なお、このような状況では、読書せよとよく言われますが、半分ハズレです。主観的な願望を慰めるような書物が多くあるからです。そのような書物を全く読むなどとは言いません。慰めがないと人生は辛すぎるからです。半分アタリというのは自分の願望や希望を他者として批判してくる書物です。批判というと非難とか人格否定と考える人が散見されます。しかし、安易な極限操作がイプシロンデルタという視点を学び、そこから批判されることによって、厳密かつ強力な解析学となることはみなさんよくご存知の通りです。皆さんには是非、人生の終わりまで自分を自分で教育することを続けてください。せっかく東京大学の教育を通じて手に入れた能力を捨ててしまうのはもったいないことです。

以上をもって数学科長の告辞といたします。本日はおめでとうございます。